

平成 20 年度卒業設計優秀作品の選定経過と講評(案)

大阪市立大学工学部建築学科　2009 年 03 月 23 日

1. はじめに

平成 20 年度卒業設計作品は 2 月 19 日(木)正午を締め切りとして提出された。同月 23 日午前中に建築学科教員による学科内判定会議をおこない、学外委員が推薦作品をピックアップするときの参考とするための優秀作品候補 7 作品が選ばれた。同日午後より、学内外委員による卒業設計優秀作品選定委員会を公開で高原記念館学友ホールにおいて行った。その経過をまとめておく。

2. 卒業設計優秀作品選定委員会

卒業設計優秀作品選定委員会は、非常勤講師を中心とした学外委員と、学科内から選抜された教員によって執り行われるものである。各自持ち点を6点として、3つ以内の推薦作品をピックアップして持ち点を自由裁量で配分する形式をとっている。選定委員には公開審査会に先立って高原記念館にて展示している全作品を見てもらい、推薦作品のピックアップと配点を依頼した。本年度選定委員は以下の通りである。

これら委員のいずれかによって推薦作品としてピックアップされた作品を、公開での優秀作品選定委員会における審査対象とした。今年度は表1の11作品が選定対象に上った。

学内委員		学外委員
吉中　　進（建築構造分野）		菅　正太郎（建築基礎製図非常勤講師）
木内　龍彦（建築防災分野）		種村　俊昭（設計演習非常勤講師）
梅宮　典子（建築環境工学分野）		長田　直之（設計演習非常勤講師）
宮本　佳明（建築デザイン分野）		山内　靖朗（卒業設計非常勤講師）
藤本　益美（建築計画分野）		阿久津友嗣（設計演習非常勤講師）
徳尾野　徹（建築計画分野）		下山　　聡（設計演習非常勤講師）
横山　俊祐（建築計画分野・委員長）		幸家　大郎（設計演習非常勤講師）
		三谷　幸司（建築会推薦）

3. 選定の経緯

本建築学科では優秀作品選定のプロセスをすべての学生に公開する。優秀とされる作品が、学内・学外の選定委員によっていかに論理づけられ決定されていくのかを見ることの教育効果は極めて高い。

公開選定委員会においては、委員長の挨拶後、得票が少なかった作品から順に、図面と模型を前にして投票した委員がその作品をどういった点から推薦するかを述べ、必要に応じ、学生との質疑応答を行った。こうして、11 作品についての審査を進めた結果、まず得点の多い上位 5 作品に絞り込まれた。

次に卒業設計としてのテーマ性と建築空間としてのリアリティの議論に移行した。最も得点の多かった河本作品は模型の作り込みや構法システムとしての評価は高かったが、陳腐な住宅プランとのギャップがマイナス評価となった。髭作品は植木鉢状ユニットを積み重ねたエコ建築の提案は一定の評価をされたが、最上階の屋根形状や住戸天井部の懸垂曲線等の造形理論が審査員を説得し切れなかった。

最終的には今村作品、内藤作品、宮脇作品の 3 作品に絞られ、それぞれの図面と模型を前にテーマ性と提案されている建築・空間のリアリティとのバランスについて議論された。その結果、そういった面でバランスの取れている内藤作品を最優秀作品に、他の 2 作品を優秀作品に選出した。入選 3 作品の講評および総評は次章以降に記述する。

なお、本年度の担当指導員は、吉中進(構造)、梅宮典子(環境)、徳尾野徹(計画)であった。

(徳尾野)

4. 入選作品の講評

最優秀賞:内藤案　drapes house

阪和貨物線の廃線跡にウェイブする2枚の長い壁を浮かべること、居住空間が切り取られている。うねる壁面は曲率と凹凸に応じて内部にさまざまな性格の場所を生み出す。また外部では、生活感溢れる周辺環境が、リニアに連続するピロティに引き込まれ、さらにうねる壁面に呼応して開放的でヒューマンなスケールの半公共空間がかたちづくられる。やや流行のデザインに流された感は否めないが、現状実際に「解放区」のように使われている廃線敷の雰囲気をうまく生かしながら、一方で現代的な生活のリアリティも獲得して、ひょっとして、意外にありかも。。と思わせるような、学生のための居住スペースを提案することに成功している

優秀賞:今村案　ナナメに棲む

人のアクティビティを「床の勾配」という単一のパラメータによって秩序づけようとする野心的な試みである。ハーフパイプ状の断面をもった集合住宅は、最も平らなボトムがメインのアプローチとなっている。緩斜面にはパーキングや公園がレイアウトされ、徐々に斜度が急になるにしたがってアプローチ動線は階段へと移行し、さらには本物の地形と同じく相対的に勾配の緩い尾根筋と谷筋に動線が集まり、最後は栈道や水平なテラスが崖から張り出すという構成である。斜度に応じて適宜、坪庭や吹き放ち等のヴォイドが設けられている。人やクルマの身体性から導かれた地勢的ランドスケープは魅力的であるが、比較して未消化な平面計画に対して疑問が呈せられた。

優秀賞:宮脇案　ていぼう集落

スーパー堤防上に住戸のライトウェルが突出し、墓石かモアイ像のように立ち並ぶ光景は、シュールで強烈な印象を残す。そして提体短手断面方向の応力状態から、構造単位となる傾いた住戸ヴォリュームを着想したところまでは、前提には無理があるものの思考のアプローチとしては興味深い。しかしその後のストーリー展開は説得性に欠ける。採光の問題をはじめとして平面計画にいたってはめちやくちやである。

宮脇案を入選に加え、本年の卒業設計は奇しくも入選3作品ともが集合住宅という結果になった。

(宮本佳明)

5. 総評

昨年度までの卒業設計に比較すると、バリエティに富んだテーマ設定とプレゼンテーションが見られるようになった。

昨今は、学内の講評会よりも学外で開催される卒業設計展の方が盛り上がりを見せるという現実がある。ここでその賛否は置くとしても、少なくとも対外的に勝負可能な卒業設計作品がもつべき質というのがいかなるものであるのか、その「モデル」を下級生も含めて学生たちがイメージ出来るようになってい、と今回の審査会を通して確信した。このことは素直に喜んでよいのではないだろうか。モデル＝目標をロック・オンすることさえ出来れば、そこはがむしゃらに頑張る市大生である。期待したい。

今後の課題としては、審査会の時間配分を工夫して設計者にオーラルプレゼンテーションの機会を与えることを検討すべきであろう。審査員の解釈よりもっと設計者の生の声を聞いてみたい。教育的にも、オーラルは技術より経験(慣れ)よところが大である。また問題解決型の卒業設計を、問題解決型であると同時に問題提起的でもある作品へと導いていくことも重要であろう。卒業設計とは建築教育の集大成であり、これからの建築人生のマニフェストである。これも先のモデル＝目標の転換と密接に関連する。新4回生にあっては、これまで流布していた「このくらい描いておけば合格できるだろう」という悪しきモデルは更新されたと認識してもらいたい。

さらに一点付け加えるなら、就職活動といった場面においても学外での受賞が学内のそれより高く評価される。このことは私たち審査員もまた逆に、その資質を外部から審査されていることを意味する。心して審査とクリティックに臨みたい(自戒をこめて)。

(宮本佳明)

(文責　建築計画　徳尾野徹)

以上

表1 得点集計表

	菅	種村	山内	阿久津	三谷	下山	幸家	長田	吉中	木内	梅宮	宮本	横山	藤本	徳尾野	計	順位
今村*		4		2		1	2		2			1				12	3
扇芝*						3				3						3	7
川本*	2													2		7	6
内藤*			2	2	3			3	1			3	3		2	19	2
髭*		2					1	1				2		2		8	5
宮脇*	3		2			2	3								1	11	4
河本*	1		3	2	2			2	3	2	3		3		3	24	1
北村											2					2	8
野口											1					1	9
山下					1											1	9
松浦										1						1	9

*印は優秀作品候補